愛知淑徳大学大学院―文化創造研究科紀要―　第４号　2017.3　1－22

学校司書の活動調査からみた学校司書の役割
―学校図書館の言語活動支援を中心に―

The role of a school librarian to support children's reading and literacy learning

伊藤真理・中西由香里

ITOH Mari, NAKANISHI Yukari

要旨

本研究では，小・中・高等学校でこれからますます活発になると考えられるアクティブラーニングでの学校図書館の活用を念頭に，学校司書の役割を検討した。様々な事例を基に検討するため，海外の学校司書の活動について，主に電子メールによる質問紙調査を実施した。特に児童生徒の言語活動での学校司書の役割を中心に，読書活動支援と学習活動支援，幼小接続での学校図書館の活用に着目した。

その結果，言語活動の促進を見据えて，様々な企画をきっかけとして児童生徒が読書に親しみ，教員や保護者などの大人が児童生徒と読書の楽しみを共有すること，理論に基づく読書指導の実践，教員や学校に関わるコミュニティとのよいパートナーシップの構築，の３つの要素が重視されていたことが明らかとなった。

キーワード：学校司書　学校図書館　言語活動支援　アクティブラーニング

１．はじめに

2014年に学校図書館法が一部改正され，学校図書館運営において学校司書が明記された。児童生徒の言語活動や探究学習で学校図書館を利用するために，学校図書館を掌る専門職員として司書教諭だけでなく学校司書が示されたわけである。学校図書館の利活用を促進する動きは，2008年に公示された学習指導要領で示されている生きる力をはぐくむことが背景にある。当該学習指導要領では，“生きる力をはぐくむことを目指し（中略）主体的に学習に取り組む態度を養うために言語活動を充実すること”（文部科学省初等中等教育局教育課程課，2011）が重視されている。言語活動では，「話すこと・聞くこと」や「書くこと」，「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させたり，言葉の美しさやリズムを体感させたりするとともに，発達の段階に応じて記録，要約，説明，論述といった活動を行う。読書活動はそのために不可欠である。そして，教科横断的に言語活動を充実するには，学校図書館を活用することが効率

的なのである。

しかし，上述の改正学校図書館法では学校司書の配置は義務づけされておらず，附則において資格や養成等についての継続的な検討が記された。日本図書館協会などの関連団体は，学校司書のあり方について協議検討を重ねてきたが，「これからの学校図書館の整備充実について（報告）」（以下，「学校図書館の整備充実報告」）（学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議，2016）において，学校図書館運営に関するガイドライン，学校司書の資格・養成のあり方に関する考え方，学校司書養成のモデルカリキュラムが公表された。そして，当報告で示されている学校司書養成については，「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について（報告）」（以下，「学校図書館担当職員の役割報告」）（学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議，2014）を基本的な考え方としている。「学校図書館担当職員の役割報告」では，学校司書に求められる専門的知識・技能として，“①学校図書館の「運営・管理」に関する職務に携わるための知識・技能と，②児童生徒に対する「教育」に関する職務に携わるための知識・技能”（p.17）があげられている。

教育支援に関する職務については，学校司書の専門性を活かすという観点から，別途検討されている教職員と専門スタッフの人材を活用することを示したチームとしての学校のあり方と関連するであろう。「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」（以下，「チームとしての学校」）（中央教育審議会，2015）では，“教員が子供と向き合う時間を十分に確保するため，教員に加えて，事務職員や，心理や福祉等の専門家等が教育活動や学校運営に参画し，連携，分担して校務を担う体制を整備することが重要である”（p.10）という背景のもとに，“チームとしての学校”のあり方を検討している。そして，“教員以外の職員が連携・分担することが効果的な業務”の中に学校図書館業務があげられており，専門スタッフとして学校司書の項目がある（p.34）。同答申では，学校図書館は，“読書活動の推進のために利活用されることに加え，例えば，国語や社会，美術等様々な授業等における調べ学習や新聞を活用した学習活動等で活用されることにより，学校における言語活動や探究活動の場となり，「アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善」を支援していく役割が期待されている”（p.35）のである。そして，課題として指摘されている学校司書の専門性の確保について，2014年学校図書館法改正に伴う資格・養成等のあり方の検討にそって，配置の充実を図ることがあげられている。つまり上述の「学校図書館の整備充実報告」において，「チームとしての学校」答申に対応した指針が提示されたということになる。

加えて，幼稚園教育要領，保育所保育指針，小学校学習指導要領では，“子どもの発達や学びの連続性を保障するため”（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議，2010），幼小接続がきわめて重要であるとして，事例集の作成・周知などの取り組みが行われている。幼児教育における５領域のなかの一つである言葉の獲得に関する領域（「言葉」）と学校教育での「言語活動」に着目すれば，学校司書が専門職員として両者を結

ぶ役割を担う可能性が十分にあり，読書活動，教材支援やティームティーチング授業などに寄与できると期待される。滋賀県の研究指定校における実践事例（滋賀県教育委員会学校教育課幼小中教育指導係，2016，p.10）では，読み聞かせでの学校司書の活用や，異年齢交流（ここでは１年生と２年生）での学校図書館利用が紹介されている。また，小・中共通の図書館教育に取り組む事例には，島根県で実践されている「幼保小中連携ステップアップ事業」がある（島根県教育委員会，2012）。このように，保幼小中接続において学校図書館の活用が期待できることが実証されつつあり，本研究でも，異なる発達段階での言語活動の円滑な接続において，学校司書の役割がますます重要になると考えている。

以上のような学校司書への期待をふまえ，本研究では特に言語活動支援に着目して，アクティブラーニングを通した教育的支援を十分に果たすことのできる学校司書のあり方を検討することを目的とする。そのために，本研究では諸外国での学校司書の活動を把握し，その役割について分析する。

２．言語活動における学校司書の役割

専門職としての学校司書資格を有する司書が配置された学校図書館と児童生徒の読書レベルの有意な正の相関関係については，様々な研究で実証されている（Lance，2012，p. 3 ；Wilson，2016，Appendix A）。しかし上述のとおり日本では，学校司書に関する法整備が一部改善されたものの未だその資格が義務づけとなっておらず，かつ12学級以上の学校で配置が義務づけられている司書教諭に対して授業時間軽減措置も一般的ではないため，その活動は困難な状態である。したがって，専門職として認知された学校図書館を掌る担当職員が学校職員の一員として教育支援活動することによって児童の読書レベル向上に寄与するような学校図書館の存在は希有であるといえよう。そこで本章では，主に日本では学校図書館をどのように活用すべきだと考えられているのかについて，言語活動の充実が盛り込まれた現行学習指導要領（2011年～013年改訂）以降の先行研究を概観する。

2013年以降ではすべての校種で現行学習指導要領が実施され，その中で言語活動の充実が重視されている。当該学習指導要領では，これを支援するためには学校図書館の活用が不可欠であることが示されている。このことに基づき，学校図書館を活用した言語活動の充実を図るためには，“司書教諭のみならず学校の全教職員が連携し、学校全体で児童生徒の学習活動・読書活動を推進していく体制をつくることが大切”（西辻，2013，p.17）であり，校内研修の充実や校種間の連携の必要性が示されている。そして，桑田（2011）は，探究学習での活動を指導する際に，欧米で活用されている指導法を用いながら学校図書館で支援することが有効であると述べている。その際に，文部科学省で各指導要項が発達段階に合わせて設定されているように，“むやみに導入することなく、児童が段階的、系統的に学習できるよう”（桑田，p. 19）な配慮を促している。これらの研究では学校図書館が言語活動の充実のために最適な場であることを示し，その活用を促しているが，具体的な活動内容については触れていない。既に

述べたとおり，「チームとしての学校」では，学校図書館の活用の必要性から学校司書の言語活動における役割の検討について指摘があり，重要な課題であるといえる。

言語活動支援での学校図書館を活用した日本国内における実践研究では，以下のものがあげられる。岡（2011）は，自身が司書教諭有資格者としてティームティーチングの形で関わることによって，国語だけでなくその他の教科においても言語活動を充実すべく学校図書館を活用している事例を報告している。当報告は，国語や体育の授業において学校図書館の蔵書を活用して言語活動と関連させている事例であり，実務者に参考となるであろう。樋渡(2013)は，授業軽減措置を受けている司書教諭が中心となって組織的に読書活動を推進している活動をとおして，このような人材がいることによって，学校図書館の運営が円滑に行われており，様々な取り組みが実施されていることを紹介している。

同じく司書教諭の視点からの事例として，公立中学校での活動に関する研究がある（村山，2013)。当事例研究では，司書教諭が学校司書と分担しながら，どのように学校図書館を読書，学習，情報センターとして活用しているかについての実践例が述べられている。そしてまた，読書量や資料の活用などにおける生徒のポジティブな変化と，職員会議等での教職員への働きかけによって学校図書館の利用に関する教職員の認識が高まっていることが報告されている。村山は，学校司書の存在が学校図書館を有効に機能させる上で重要なこと，司書教諭とそれぞれの専門性を尊重し合う連携を目指していることをあげ，両者の役割分担が重要であると指摘している。

教員と学校司書の連携のあり方については，欧米においても十分な検討が進んでいないことが指摘されている（Wilson, 2016, p.60)。しかし，教職員の連携が言語活動支援において非常に重要であるという研究結果も見られ（Eri, 2016; Chu, 2017)，こうした連携が予算面での節約にもつながるという報告もある（Wilson, p.63-64)。

樋渡は同一の事例研究で，上述の実践例の他に，行政を中心として地域が一体となって読書活動推進をはかるための計画策定の取り組みを紹介している。地域社会における諸機関との連携については，平久江（2014）が，学校図書館の読書，学習，情報センターとしての３つの機能に加えて第４の機能「連携センターとしての機能」と位置づけ，これからの学校図書館と学校図書館担当者の役割において重要であると指摘している。平久江によれば，学校図書館は，内的（読書，学習，情報センター）な進展と，外的（都道府県や市町村における子どもの読書活動推進計画）な進展の中で発展してきており，これらの発展が市川市に見られるような学校図書館支援システムの構築につながっていると説明している。このような学校図書館は地域連携型図書館であり，そこで言語活動の充実への支援を行うには，司書教諭と学校司書が職務の優先順位と協働による実施の観点に基づいて，明確な分担よりも協働しながら職務を果たしていくことが重要であると指摘している。

このように，学校図書館の活用に関して先進的な実践報告が含まれているものの，言語活動での学校図書館の活用において司書教諭と学校司書の職務や具体的な連携のあり方などについ

て，未だ十分に研究されているとは言いがたい。学校司書に関する法整備が一部改善されたことを受け，特定の先行例を特別視せず，今後はどの地域であっても，司書教諭と学校司書との連携によって同質のレベルでの学校図書館の活用が問われていくであろう。その際，授業数軽減措置などが一般に実施されにくい状況にある司書教諭がその役割を適切に果たすことのできない現状では，学校司書の活動がこれまで以上に重要となり，その役割について慎重な検討が必要である。そこで本研究では，社会的，教育制度の事情は異なるものの，言語活動支援を積極的に実施している海外の学校司書の事例を参考とするために，欧州を中心として調査を実施した。

３．海外での学校司書の活動に関する調査

3.1　調査方法

上述のとおり，児童生徒の言語活動において専門的職員としての学校司書の重要性が指摘されている。国内でも学校司書が積極的に言語活動支援に取り組んでいる事例はあるが，未だその役割について十分に認識されているとはいえない。本調査の目的は，海外での学校司書の活動について把握し，学校司書のありかたを検討する一助とすることである。そのため，特に読書活動と学習活動の支援を中心として，どのような活動を行っているのかについて調査した。

調査は2016年８月～11月にかけて実施し，学校司書養成カリキュラムを提供しているイギリスおよび近隣諸国の大学院教員や，現職学校司書と知己のある図書館員に依頼して協力者を得た。本調査では，日本の教育体制の状況と異なるものの，学校司書の社会的な認知度等で日本に近いと思われる欧州を対象とした。共著者伊藤の在外研修滞在先を中心として，英語でのみ調査が可能な範囲にとどまっている。具体的な調査協力者は，学校司書２名（オランダアムステルダム市中等教育（以下，中・高等）学校司書，イギリスノースハンプトンシャー州中・高等学校司書），公共図書館司書（オランダロッテルダム市），学校図書館サービスアドバイザー（イギリス）の４名である。

本調査では異なる国の調査協力者が含まれることと，調査時期に夏季休暇が含まれたため調査の日程調整が困難であったことから，面接調査を実施したロッテルダム市公共図書館司書を除き，すべて電子メールによる質問紙調査法により回答を得た。収集した回答について理解できない点やさらに詳細な情報が必要な場合には，再度その説明を依頼するなど，面接調査協力者を含め全調査協力者と数回にわたり電子メールでのやりとりを行った。

質問項目は，共著者中西が中心となって作成した。調査時では「学校図書館の整備充実報告」が公表されていなかったため，作成した質問項目は，同報告で示されている知識・技能に沿っているわけではない。しかし，経過報告や「学校図書館担当職員の役割報告」などは確認しており，かつ作成者自身が学校司書でもあるため，学校司書を取り巻く現状と現場のニーズをふまえた内容となるように努めた。特に，学校図書館の活用で求められている読書活動や探究学習の拠点としての位置づけ（「学校図書館担当職員の役割報告」，p.４－６）に沿って，読書活

動支援と学習活動支援に着目した。各調査協力者にはなるべく学校司書の一般的な状況についての回答を依頼したが，具体的な活動等については調査協力者らが行っている内容についての説明を求めた。また本研究では，児童生徒の言語活動を促進する上で異なる発達段階での教育連携が必要となると考えていることから，幼小接続に関する質問を設定した。学習活動支援では，中西自身が読書指導の一手法であるLiterature Circles(Daniels, 1994）を用いた授業の有効性について研究していることから，本調査でもその可能性を探るためにこのことに関する質問項目を加えた。具体的な質問項目は下記のとおりである。

［学校司書の概要と職務］

- 学校司書の配置の状況や資格など
- 具体的な職務

［幼小接続］

- 幼児教育での学校図書館利用
- 幼稚園での司書の活動の有無

［読書活動支援］

- 学校での読書タイムの実施の有無
- 親子読書など，読書に親しむイベント等の実施の有無
- 読書支援の方法
- 児童生徒による図書委員会の有無

［学習活動支援］

- 探究学習での学習支援
- 授業でのLiterature Circlesの導入の有無

3.2　調査結果

本節では，調査協力者と各国の学校司書の概要および担当職務の概要についての結果をまとめた。

3.2.1　調査協力者と学校司書の概要

本調査協力者らの所属と，勤務国での学校図書館に関連する状況の概要を表１に示した。イギリスでの主たる調査協力者は，学校図書館サービスアドバイザーだったが，当アドバイザーを通じて中・高等学校司書（2016年SLA（School Library Association）School Librarian of the Year受賞者）から具体的な職務内容などについての情報を得たため，両者を協力者として含めた。また本調査では，オランダでの調査協力者の一人として公共図書館司書が含まれている。これは，調査協力者の勤務するロッテルダム市では，市の小・中・高等学校に学校図書館がほとんど設置されておらず，市立中央図書館が学校図書館サービスセンターの役割を果たしているためである。調査時点では，同市小学校を対象として公共図書館から司書が派遣されている。図書館スペースが設けられている学校もあるが，担当する職員が存在しないのが現

状である。そのため本調査では，学校図書館サービスコーディネータを担当している司書に面接調査を実施した。表１では，各国の学校図書館に関わる義務教育対象年齢，学校図書館の設置状況，職員の配置状況，学校司書の資格についてまとめ，学校図書館を取り巻く状況について備考に記した。

表１　調査協力者と学校図書館関連概要

職種	学校司書	公共図書館司書 （学校図書館サービスコーディネータ）	学校図書館サービスアドバイザー （元教員，元公共図書館司書）	学校司書
所属	中等教育学校（アムステルダム市）	ロッテルダム市立中央図書館	学校図書館サービス	中等教育学校（ノースハンプトンシャー）
勤務国	オランダ		イギリス	
義務教育年齢*	満5才～18才（初等教育（Group1～Group8）8年間と中等教育（Year1～Year6）4年間） なお、16歳までに、いくつかのコースに分かれている中等教育の卒業証明書を取得していれば、残りの期間は通学しなくとも良い		満5歳～16歳 （初等教育（5歳～11歳）と中等教育（12歳～16歳））	
学校図書館の設置	各校に設置	調査対象自治体では，ほとんど設置なし	各校に設置	
職員の配置状況	各校で異なる メディアコーチおよび/または学校司書	なし	学校司書（初等教育学校では，ほとんどの場合一人。中等教育学校ではアシスタントがいる） （図書館はリテラシーコーディネータの教員が管轄しているが，授業指導のため，図書館に充てる時間が取れないのが現状） （以下の情報は欄外の引用文献より＊＊） ・学校司書の多くは専門資格を有していない ・27%の初等教育学校は一般教員によって管理されおり、9%はボランティア、14%は管理者がいない。 ・2007 年の調査(Booktrust)では、初等教育学校の図書館の責任者のうち31%は、児童文学につ いて専門知識を有していないことがわかった。 ・中等教育学校：CLIP(イギリス図書館情報専門職協会)の調査によると、学校図書館の 58.7%は資格を持った司書によって運営され、34.8%は「その他の」指定された学校 司書によって運営されている ・Booktrust 2007の調査では、中等学校の図書館を管理する 回答者の78%は、児童文学の専門知識あり，22%がなしだった	
学校司書の資格	・現在，大学での学校司書養成は提供されていないようである ・2007年からDutch Academy for Media & Societyによって始まったMedia coach(図書館主任）研修やGO Training (Royal Dutch Association of Information ProfessionalsとNetwork for Commercial Archiveによる研修プログラム)を受講する機会がある ・メディアリテラシー，情報スキル，リテラシーサービスマネジメントなどを内容としていて，教師，学校司書，図書館に関連する職員を対象としている	公共図書館から派遣されている職員はすべて企業による学校図書館研修を受講し，修了証を取得している	大学機関での学校司書の学位取得コースあり CILIP School Libraries Group とSLA（学校図書館協会）による研修あり	
備考		・2003年～市立中央図書館が各初等学校へ職員を派遣し，サービスセンターの役割を果たしている（中等学校への派遣は現在検討中） ・2016年10月現在，約20名のスタッフが市内121校に派遣されている。 ・職員は複数校担当し，基本的に1人あたり各校週2時間割り当てられているが，学校からの要請に合わせて勤務時間数は異なる	・地区で管轄されている会員登録制の学校図書館サービスあり ・学校へのクラス単位での資料・機器の貸出 ・教員，学校司書，ボランティアへの指導や研修など（地区ごとに多少の内容の差あり）	

*外務省．諸外国・地域の学校情報（http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/index05.html）参照

**文部科学省．3 イギリスの読書環境・読書活動の実態，p. 63（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/10/22/1323725_14_1.pdf）参照

表１中オランダの「学校司書の資格」欄に記載されている「メディアコーチ」は，Dutch Council of Cultureが国内のメディアリテラシーを向上させるための提言（2005年）の中でメディアリテラシーの専門職を研修する必要性を示して，2007年から始まった専門職である。一定のカリキュラムを修了すると，National Media Coach certificateの資格が与えられる（Nationale Opleiding Media Coach）。ICT技術やソーシャルメディアの浸透に伴って，学校司書がこれらの関連分野の知識や技術を習得する必要性も指摘されており（Ejikeme, 2016; Wilson, 2016），オランダでは児童生徒の言語活動を支援する専門的職員として位置づけられているようである。

このように特定の資格を持って活動する専門職があることから，次にオランダ，イギリスの

順に，学校司書の人材養成・研修について簡単にまとめておく。

本調査協力者の説明によれば，オランダでは学校司書を養成するための大学機関での教育コースがなくなっており，日本と同様に一般司書の教育を受けた者が務めるケースが多い。近年では，学校司書がさらに特定の研修を受講して，メディアコーチの資格を得ているケースが増えている。本調査時点では，メディアコーチ養成コースとして，Dutch Academy for Media & Societyが開講するNational MediaCoach Training（NOMC）と，ドキュメンテーションプロバイダーKBenPによる GO Training（元Royal Association of Information Professionals（KNVI）とNetwork for Commercial Archive（NVBA）によって提供）がある。NOMCの内容は，図１（Nationale Opleiding MediaCoach）のとおりである。当該資格コースでは，毎年更新研修を受講することが義務づけられており，春の年次大会の出席と秋の地域毎の研修に参加することによって，継続的に最新の知識とスキルを共有できるように考えられている。

	Modules National Opleiding MediaCoach	Content description Nationale Opleiding MediaCoach
1	Introduction and definitions	**Framework of National Opleiding MediaCoach**
2	Media literacy	**Introduction on media literacy and explaination on 4 media literacy 4 competence levels**
3	Media and Society	**Actual media related topics based on information from sources such as sciences, research, government or different digital sources;** **- The WIFI-generation, the mobile internet** **- New media and information skills** **- Role of media in the lives of young people** **- digital bullying** **- MSN, profile and social sites** **- Media addictions** **- commerce and digital advertising** **- sexualization of the media** **- technical media developments** **- media ethics** **- media usage in education** **- virtual communities** **- the web 2.0** **- youth work and justice** **etc. etc. etc.**
4	Media and youth	**In this module MediaCoaches learn about the role of the media in the lives of youth. We learn about youth media usage.**
5	The role of the National MediaCoach	**We discuss the role of the National MediaCoach in improving media literacy of youth, parents, teachers and other target groups. Self-reflection is part of this module. We also learn about the future of schools and libraries in general and about the library as a media literacy desk.**
6	Skills	**By pragmatic exercises we practice coaching and educational skills, communication and presentation techniques as well as project management.**
7	The MediaCoach strategy plan	**As the final assignement National MediaCoaches learn how to develop their own strategy plan, helping them to be successful in their own individual working environment.**

図１　Nationale Opleiding MediaCoach研修内容

後者のGO Trainingでは，主に現職司書を対象とした18日間（約週１回各日午後４時間）のコースがある（GO opleidingen）。内容は図２（Google英語翻訳のページ）のとおりである。Basic CourseとPlus Education Course，ソーシャルメディアの経験が浅い受講者向けのEntry Route New & Social Mediaというコースで構成されている。これらはモデュール形式になっており，受講したいコースを選択することが可能である。本調査協力者の一人であるオランダの学校司書はGO Trainingを受講している。

Content

The course is composed of a base section and three-plus programs.

The basic process consists of the following parts:

Media literacy (3 days)

- Programs and projects for the media coach
- The library as the heart of the media society
- Using theories and models on media

Information Skills (2 days)

- Teach yourself and others to look even smarter
- Discover the latest information technology websites, services, apps and tools

Innovation (3 days)

- The media as makers coach coach (creating, editing and programming)
- The media as a technology coach coach (virtual reality, robotics and 3D printing)
- The media coach as curator and community builder

Best routes are:

A. Teaching (3 days)

- Basic training for media didactics coach
- The media coach in education
- New media applications for education

B. Leadership (3 days)

- Success Managent: Developing Successful literacy projects
- Change Management: Transitions by facilitating soft skills management
- Online Marketing: Successful promotion of literacy services and products

C. Floor (2 days)

- Media literacy 4: Science, philosophy and history of media
- Information Skills 3: New perspectives on information

boarding Route

Media for aspiring coaches with little experience with **New and Social Media** is an **Entry Route,** which includes:

- Hands-on training in the use of services and devices for beginners
- Hands-on training in the use of services and devices for advanced skiers

図２　GO Media Coach for Library and Library Professionals研修内容

イギリスでは，2015年９月時点で６大学が現職者に対する学校司書コースを提供している（SLA. Training for those working in school libraries）。また，SLAが主催する多彩な研修コースが用意されている（SLA. Training）。SLAとCILIP（Chartered Institute of Library and Information Professionals）YLG（Youth Libraries Group）との共催による年１回のWeekend Course，受講対象者を小，小・中，中・高等学校別にして年間を通じて開催されるRegional CoursesやOnline Courses，各SLA Branchが提供する研修など，自分のレベルや内容，日程に合わせた研修の受講が可能である。2016年～2017年開講の研修内容の一部には，リテラシーや読書の楽しみを向上させるためのストーリーテリング，学校図書館マネージメント，生徒のリサーチスキル指導，オンラインメディア，読書指導，資料整理などが含まれている。また，CILIP SLG（School Libraries Group）では，隔年開催の会議の他に，Regional Eventとして各支部がワークショップなどを実施している。

3.2.2　担当職務内容

本項では調査で得られた回答について，まず調査協力者によって示された職務内容についてまとめ，その内の読書活動支援と学習活動支援については，本調査でのその他の質問と合わせて結果を分析し，（２）と（３）にまとめた。

（１）職務内容の概要

調査協力者からの回答に基づき，担当職務の概要について表２にまとめた。読書活動支援，学習活動支援についても同表にまとめている。調査者は，担当職務について特に規定の項目を提示しなかったため，本調査回答であげられた内容について，共通する職務を調査者が同一の項目にまとめ，「学校図書館担当職員の役割報告」にあげられている【学校図書館担当職員が担うことが求められる職務の標準】（p.11－16）にしたがって整理した（表２中の職務の種類，職務内容の文言は，当報告に沿っている）。同標準を用いたのは，「学校図書館の整備充実報告」の学校司書養成モデルカリキュラムがその考え方に基づいていることから，学校司書の役割とそれを果たすために必要となる知識やスキルの養成との関連を今後検討することが容易になると考えたためである。本調査回答の具体的な内容は，該当する項目の回答事例欄に記載した（表２参照）。なお，本調査での公共図書館による学校図書館サービスは，他の回答と性質が異なるため，理解しづらいと思われる項目については事例の欄に公共図書館であることを示した。

【学校図書館担当職員が担うことが求められる職務の標準】に示された内容と，本調査データを照合した結果，「学級文庫等における資料管理」以外，すべての職務内容について該当する回答が得られた。さらに，職務の標準には該当する項目のなかった「学校管理者，学校関係者との密接なコミュニケーション」，「保護者への指導，働きかけ」，「小中接続」に関する回答が得られた（表２中の網掛けで示した項目）。これらについては，後述の該当項目で扱う。

著者らが今後検討していきたいと考えている幼小接続の試みに関連した幼稚園児の図書館利用についての質問に対しては，すべての調査協力者が幼稚園児は公共図書館を利用すると回答

表２　調査協力者の職務

	職務の種類	職務内容	本調査回答事例
①「間接的支援」	図書館資料の管理	図書館資料の選定，収集，廃棄	各教科教員と相談して選書 教員，児童生徒への購入希望の定期的な呼びかけと，可能な限り購入希望に対応 SLA（UK）によるガイドラインに沿った選書 図書館システムを利用して蔵書の偏りをチェック，特にジェンダー，異文化関連資料の多様性を確認 各学校と相談（公共図書館）
		図書館資料の発注，受け入れ，分類，登録，装備，排架，保存，補修，廃棄	資料の受け入れ，分類，蔵書管理 時代に合わない資料の入れ替え 低学年用資料の色分けによる分類，フィクションのジャンル分類 図書館システムを使った蔵書管理 新刊書をなるべく早く受け入れる 各学校へ配布する資料の管理(公共図書館)
		図書館資料の展示	平置きを多用した図書の排架 新しい出来事や話題に関連した展示やイベントの作成（例：オリンピック期間中にラップミュージシャンの歌詞に基づく展示）
		学級文庫等における資料管理	
	施設・設備の整備	施設案内・利用案内，書架案内の設置	図書館利用案内のしおり作成
		環境整備，保守・点検	児童生徒に安全で楽しめる場を提供 可動式什器を用いた居心地の良い場の設定
		情報機器の整備・管理	コンピュータ，CD，DVDの利用・管理 図書館の価値を引き出すためのイベントに用いるプロジェクタや大スクリーンの設置
	学校図書館の運営	他の学校図書館や公共図書館との連携，学校図書館担当職員間の協力	学校外とのネットワーク作り 近隣の学校との共同イベント開催
		広報・渉外活動	2ヶ月毎にニュースレター発行
		学校図書館の運営に関する業務	授業利用，資料の手配等，教員と年間計画の立案
		予算編成・執行業務	イベント用予算執行
		利用実態調査，集計・評価	教員へのフィードバック 校長への年1回ヒアリング
		学校管理者，学校関係者との密接なコミュニケーション	The Senior Management team（校長，教頭）への働きかけ 幅広い学校コミュニティの関係者への定期的な理解の働きかけ 学校経営に関わる自治体関係者との連絡をはかる
②「直接的支援」	館内閲覧，館外貸出	利用案内，図書館資料の提供	マニュアル作成
	ガイダンス	学校図書館利用の指導・ガイダンス	全クラス対象の図書館の使い方指導
	情報サービス	レファレンスサービス・調べもの相談，フロアワーク	児童生徒の探究学習に対して教員との協働によるレファレンスサービス対応 児童生徒が取り組むトピックはいろいろな教科にまたがっているため，教科をこえた情報の探し方を指導 小学3年生向け，中学7，9，12年生向けに情報スキルの指導
		情報検索，情報の収集・記録・編集のアドバイス	各教科での探究学習での情報収集と適切な情報の選択についての指導 最上級生への読書レベル向上のための情報スキル指導 生徒のリサーチスキルを向上させるための文献利用支援（特に上級生のGCSE向け学習の支援）
	読書推進活動	読書推進活動の企画・実施	担当職員による新しい読書活動サービスの検討 児童生徒による選書ツアー World Book Dayにちなんだ物語主人公のコスプレコンテスト 手作り賞品付きイベント 職員と生徒のブックバトル 図書館での泊まりがけパーティ コミックコンテスト 読書会，著者を招待した読書会 読書チャンピオンの表彰 読書メンターの活動推薦 ブックフェア（大規模書店に依頼して放課後に校内で書籍販売） メーカースペースを利用した活動
		児童生徒の興味・関心・発達段階・読書力に合った図書館資料の案内・紹介	各学年での図書の紹介 トピック毎のリーディングリストの作成 フィクションをジャンル別に分類して探しやすくするための工夫 絵本の活用 授業での課題による読書タイムや授業時間外に設定された読書タイムのための資料の案内
③「教育指導への支援」	教科等の指導に関する支援	授業のねらいに沿った図書館資料の紹介・準備・提供	各学期初めに，各教科主任と必要な資料の確認 カリキュラムに応じた授業資料リストの作成と提供
		学校図書館を活用した授業を行う司書教諭や教員との打合せ	自校用リテラシーポリシーの共同作成 歴史，科学，国語など様々な教科教員との各授業の打合せ 全7・8年生向け図書館での授業の年間計画の立案・検討 読書指導支援のための教員との打合せ
		学校図書館を活用した授業への参加	The Reading Environment（Chambers，1991），Tell Me: Children, Reading & Talk（Chambers，1993），Talk4Writing（Corbett）に基づく言語活動指導 メディアリテラシー授業の担当 全クラスを対象とした図書館での読書（読書力向上を目的）の授業担当 異なる教科での情報リテラシー授業の担当 高校最上級生向けIGCSE用英語科でのアカデミックスキル授業の担当
		学校図書館の活用事例に関する教員への情報提供	教員への図書館利用の働きかけ 全新任職員対象の図書館ガイダンスの実施 教員対象読書指導 教員対象のブックトーク
		学校図書館を活用した授業における教材や児童生徒の成果物の保存・データベース化・展示	（探究学習の成果を劇で発表）
	特別活動の指導に関する支援	委員会活動・読書クラブ等に対する助言	（該当する委員会はないが，Library monitaorsやReading Championsといった読書活動が活発な生徒を表彰し，他の生徒に読書を促す活動あり）
		文化祭や修学旅行等，学校行事に関わる資料の掲示・提供	（学校行事に関連していないが，一般にどの学校も行うWorld Book Day，National Book weekに関連した企画あり）
	情報活用能力の育成に関する支援	資料の検索方法やデータベースの利用方法についての指導に関する支援	教科毎のプロジェクトに対応してコンピュータを利用した情報の探し方の指導
		調べ学習に関する支援	教科毎の図書館を利用した探究学習での適切な情報の探し方の指導 ビッグ6モデルに基づく探究学習支援
該当する項目のなかったもの	学外との連携	保護者への指導，働きかけ	定期的な保護者対象読書会の開催 コーヒータイムを利用した保護者向けリテラシー指導（児童への指導内容を紹介）
		小中接続	近隣の全小学校に出向き，発達段階過渡期の読書の問題について説明。このことにより入学前の小学生との対面，さらに彼らの保護者に発展的読書に向かうための娯楽的読書の重要性について認識するきっかけを作る

している。イギリスでは，幼稚園で特別な機会を作って司書を招くことがあるが，保護者の中に司書がいるなど特殊な事例のみであり，学校司書は幼稚園で活動していないとのことだった。また，小学校と接続した幼稚園がある場合には学校図書館を共有する可能性があるものの，図書の一部を利用するといった限定的な利用に限られるとの回答を得た。表１の義務教育年齢の欄にまとめたとおり，オランダやイギリスでは児童が満５才になると小学校に入学し義務教育が始まる。したがって，日本で検討されているスタートアップの体制が既に組織的にできている可能性も推測できる。

幼小接続についてではないが，表２の最後の欄に記載したとおり，「中１ギャップ」に対応した中・高等学校司書による活動の回答があった。本調査協力者らに中・高等学校司書が含まれることから，このような事例を得ることができた。しかしながら，保幼小中接続については教育体制も含めて別途慎重に検討する必要があり，本調査では実施の有無の確認にとどめ，これ以上の調査は実施しなかった。

（２）読書活動支援

本調査の協力者全員は，学校で読書のための時間が設けられていると回答している。児童生徒は読書タイムで自分の読んだ本を交換して，他の人に紹介することもある。しかし，読書習慣の定着をねらいとした日本での朝の読書タイムとは異なり，このような活動は授業時間に組み込まれている。そして，児童生徒が読書に親しむための工夫としては，各種のイベント開催の事例があげられた。親子読書の実施やその促進と関連して実施しているという回答はなかったが，保護者に対しても読書を呼びかけるといった活動が見られた。

表２での読書活動支援に該当する項目は，②「直接的支援」中の「読書推進活動」である。本調査回答から，小学校，中・高等学校ともに読書推進活動に対して学校司書の熱心な活動が見られることが明らかとなった。このことは，読書に親しむための方策として「読書推進活動の企画・実施」の欄に多くの事例があげられていることからも推測できるであろう。本調査協力者の中・高等学校では，課題として男子を読書活動に参加させることがあげられており，男子生徒の関心を引きそうなテーマの企画をいろいろと試みた結果，グラフィックノベルのコレクションが充実したという結果も得られたようである。著者を招待した読書会，“Manga groups”，“Exotic meat tasting session”といったグループ活動などの企画は，男子生徒が本に親しむことへのきっかけ作りに大きく貢献しているとのことだった。しかし，これら一連の企画での最終的な目的は，性別に関係なくどの児童生徒も読書を楽しむことができるようになることであり，その目的に近づく努力がなされている。

こうした企画に加えて，選書ツアーは児童生徒の読書意欲を向上させる効果が高い方策として見なされているようである。重複タイトルなど余程のことがない限り，学校司書は児童生徒の選択に口を挟むことはせず，自由に選ぶことが許されている。児童生徒は，自分たちの選んだ本が書架に並ぶのを見ることは魅力的なことであり，それによってますます本に親しむよう

になる。同時に，選書にあたって友人など周囲の好みや希望を調べるといった，児童生徒の積極的な態度を促すことにもつながっている。

企画に関する活動ではないが，特に低学年児童に対して読書を促進するための方法として，本を探しやすくするためにフィクションをジャンル別に分類したり，色分けで示したりするといった工夫をしていることがわかった。こうした作業は，図書館職務内容として間接的支援に分類されるが，読書促進においても重要とみなすことができる。さらに，「学校図書館の活用事例に関する教員への情報提供」であげた教員対象読書指導や「保護者への指導，働きかけ」での保護者対象読書会の開催にみられるように，大人がまず読書の楽しみに関する意義を理解することによって児童生徒の身近なお手本となり，そのことが児童生徒の読書を促進すると考えられている。

お手本を示すという点では同じく本調査での企画に関する回答に見られるように，図書係の生徒や読書チャンピオンを選ぶといった企画によって，読書の好きな生徒を通して他の生徒に読書を促すことが紹介されている。本調査結果では，生徒による図書委員会活動の回答は得られなかったが，CILIP SLGとSLAは，共催で図書館活動に貢献する生徒を表彰する“Pupil Library Assistant of the Year Award”という賞を2014年から企画・実施している（CILIP SLG, SLA）。同賞は，図書館活動への協力，他の生徒に対するロールモデル，図書館を通じた生徒自身の前向きな変化などに対して評価される。この企画はさらに学校司書に対して，図書館アシスタントとして生徒を教育するという動機を与えることにもつながり，図書館活動の活性化に貢献しているように思われる。

また，本調査協力者が所属するロッテルダム市公共図書館では，読書を活発にすることが結果的に生徒の学習能力の向上につながることを期待している。そのために，The Reading Environment（Chambers, 1991），Tell Me: Children, Reading & Talk（Chambers, 1993）に基づいた授業での読書活動指導を活発に行っている。しかしながら，CITO test（オランダの政府教育評価機構CITOによる全国共通学力試験。小学校卒業年に生徒全員参加で実施）対策のための支援といった直接的な学習支援は実施していない。あくまでもまず児童生徒が読書に親しみ，好きになることを目指しているのである。読書をまず普及させたいという背景には，当該市の学校では児童生徒による資料の貸出が許可されていないことも要因の一つとしてあげることができる。貸出規制は単に学校側の資料の紛失への危惧がその理由なのだが，図書館で本を借りて読むということが当たり前のこととならない限り，読書の促進も図書館利用も向上せず，図書館を利用した児童生徒の学習活動が発展しづらい。そのため，まず教員や保護者に働きかけて児童生徒の手本となることなども含め，様々な手段によって読書に親しむことが期待されているのである。

（3）学習活動支援

学習活動支援については，表2中②「直接的支援」の「ガイダンス」，「情報サービス」と③

「教育指導への支援」全般が分析対象として該当する。全調査協力者の回答から，全校生徒に対する図書館ガイダンスが実施されていること，教員と協働でリテラシーポリシーを作成し，教員の授業支援のみならず学校司書自身が情報リテラシーや読書力向上のための授業を担当して指導に従事していることが明らかとなった。調査協力者らも，各教科での情報リテラシーの指導を担当している。イギリスでは一般に，３年生，７年生，９年生を対象として学年に合わせた情報スキル指導が実施されており，アムステルダム市中・高等学校司書は，主にフィルムを利用しながら，やはり様々な教科でのリテラシー教育を担当していると回答している。情報リテラシーの授業では，単に理論を学習するのではなく，実際に取り組んでいるプロジェクトなどを例にあげたり，小グループ編成にしたりするなど，生徒のリサーチスキルを高める工夫がなされている。イギリス中・高等学校司書はまた，全クラスを対象として図書館で実施されている読書の授業を担当している。これは，生徒がこれまでに学んだ読書スキルを応用してさらに読書力を向上させることを目的とした授業とのことだった。

このようにクラス単位を対象とした情報リテラシー教育支援が行われつつ，探究学習支援においても，学校図書館がしっかり活用されている。あるトピックについての探究学習が教科を横断して行われる場合には特に，図書館の利用は便利である。コンピュータを使った情報の探し方の指導，適切な情報の選択など，教員との打合せに基づいて学校司書が図書館での個別指導を丁寧に行っている。こうした活動では，資料の種類の区別なく助言や指導を行うことになることから，「学校図書館担当職員の役割報告」で別立てになっている「情報サービス」職務のレファレンスサービスと情報検索の項目については，どちらか一方を行うということではなく，実際には内容的に重複するものであろう。

このような児童生徒への学習支援と同様に，調査協力者らは教員への支援も活発に行っている。回答では，各学期の初めには必ず各教科主任と打合せを行い，図書館での授業についての年間計画を立案・検討する，各教科の授業で必要な資料を確認して図書館で準備をする，必要に応じて教科毎の授業資料のリスト作成を行い児童生徒に配布できるようにする，などの活動があげられた。イギリスでは各地区に会員制の図書館サービスセンターが設置されており，クラス単位での資料や印刷資料以外の機器の長期貸出などが行われている。こうした体制があることも，資料の準備には効果的である。

教員への支援は，直接的な授業支援だけではない。“教員対象読書指導”を行って，読書の楽しさを教員自身が体験することから仕向けている。同時に，新任職員全員に対する図書館ガイダンスを実施し，教員がまず図書館を利用することを目指している。そして，教員を対象としたブックトークを実施し，教員が常に図書に関する最新の情報を得ることができるように新刊情報を伝えている。

読書指導の一手法であるLiterature Circlesの利用の有無についての質問に対して，本調査協力者らからは同手法を用いているという回答は得られなかった。しかし，授業の取り組みの中で，オランダではAidan ChambersによるThe Reading Environment（1991）およびTell

Me: Children, Reading & Talk（1993）を利用し，イギリスでは2008年に子ども・学校・家庭省（現教育省The Department for Education）のNational Strategiesのために開発されたPia CorbettによるTalk for Writing（The Department for Education）が広く用いられているとのことだった。また，小学校でのこれらの活動では，絵本が効果的に活用されている。Tell Meは，Chambers自身の経験に基づく実証的な方法である（Anderson, 2014, p. 160）。Talk for Writingは，Chambersのブックトークなど口頭表現を活用した理論に基づいて構築されており，近年で最も注目に値するライティングに関するプロジェクトの一つと評されている（Jolliffe, 2014, p.25）。これらは，読書を通じて児童生徒がライティングスキルを習得することを目指している。このように本調査協力者らは，特定の理論に基づいた指導によって，効果的に学習支援を行っていることがわかった。

4．考察

本調査協力者らが学校司書の活動として重点を置いていた内容を整理すると，言語活動の促進を見据えて，様々な企画をきっかけとして児童生徒が読書に親しみ，教員や保護者などの大人が児童生徒と読書の楽しみを共有すること，理論に基づく読書指導の実践，教員や学校に関わるコミュニティとのよいパートナーシップの構築，の３つの要素をあげることができる。これらは既に先行研究でも指摘されており，「学校図書館担当職員の役割報告」にあげられている学校図書館担当職員の活躍事例（p.27－55）などに，これらの要素に関連した日本での活発な取り組みが見られる。では日本の学校司書がその機能を発揮するためには，さらに何が必要なのであろうか。本章では，本調査結果で明らかとなった海外の学校司書活動内容を基に考察する。

4.1　読書活動支援・学習活動支援を支えるパートナーシップ

本調査結果では，児童生徒を読書に親しませるために，対象学年や性別，地域の特徴を考慮した様々なイベントの企画，資料を探しやすくする工夫，児童生徒を取り巻く大人への読書指導が実施されていた。こうした楽しみのための読書は，単に娯楽的読書ではなく読解力を高めるための発展的な読書である。このことは，全国共通試験でのレベルに見合うだけの読書力の向上が目指されているイギリスでの事例からも理解できよう。さらに調査協力者らの回答には，読書活動で図書館を利用するように促すには，予算措置も適切に行われていることが必要であるという指摘があった。読書の興味を引き起こすための企画に予算の一部を活用でき，児童生徒を惹きつけるような新刊書を継続的に購入できることが大事であるという認識である。図書館に読みたいと思う本があってこそ，児童生徒の読書の楽しみを後押しすることが可能になるからである。

これら一連の活動のためには，学校関係者が読書の意義とそのための図書館予算措置の重要性を十分に理解しておかなくてはならない。当然のことながら，こうした理解は自然に生まれ

るものではなく，図書館からの積極的な働きかけが必要なのである。本調査では，校長・教頭に対する図書館活動の説明と協力が重要だという指摘があった。校長の役割の重要性は，学校司書の資質向上の観点から平久江も指摘している（平久江，p.52)。調査協力者の回答では，校長は定期的に学校を異動するため，学校図書館に理解のある校長が赴任した場合に，新しい赴任先の学校図書館活動が円滑になるという説明があった。学校司書が職員体制の一員として不明瞭な場合でも，校長の指導の下で学校図書館活動が教育計画に明示されれば，それにしたがって授業の運営が検討されるからである。ロッテルダム市公共図書館では，上述の効果を狙って校長に定期的にヒアリングを行い，学校図書館活動の改善を図っている。

児童生徒への直接的な読書指導では，授業内での指導自体は教員が担当するであろうが，学校司書の協力が不可欠である。本調査では，一定の評価をうけた理論に基づいて指導が実施されていることが明らかとなった。公共図書館員が小学校に派遣されている場合でも，理論に基づいて指導が実施されており，それが実践されている限り，学校側での読書指導に対する円滑な理解につながることが期待できる。加えて，一定の質を保った指導が可能になる。付随してそのための研修も必要であり，教員と学校司書両者に向けた研修が種々開催されている。

このように，学校司書が児童生徒の教育指導に携わる上で，教員や学校に関わるコミュニティとのよりよいパートナーシップの構築が不可欠である。このことの重要性は，「チームとしての学校」の答申からも理解できる。またこれは目新しい指摘ではなく，日本図書館協会学校図書館職員問題検討会による報告書（2016, p.11－14）でも大項目としてあげられており，既に「学校図書館担当職員の役割報告」で，このことを意識した学校司書の事例も示されている。しかしながら，これらの指摘では横とのつながりについては記述が見られるが，組織における縦のつながりや組織外へのアプローチに関しては言及がない。日本の場合は，司書教諭との２人体制であることが学校司書の役割に影響していると考えられるが，司書教諭の実態や学校司書の実際の活動を考慮すれば，校長らへの働きかけ，学校に関わる上部組織への定期的な情報提供について学校司書がより効果的な役割を担うことが求められるのではないだろうか。

また，教員との協働の必要性については諸処で指摘があるが，教員を対象とした読書活動への理解を得るための支援や図書館を活用するための研修など，教員への積極的な支援については触れられていない。日本では，これらについては授業に関わる教員への支援という形で行われると考えることができるが，多様なメディアの理解や情報リテラシーに関する知識についての学校司書の専門性を考慮すれば，職務として明確な役割の言及があっても良いと思われる。2004－2006年にイギリスで実施されたLiterature Matters Projectでは，児童を対象とした読書指導における学校司書の専門的な役割に対する教員の理解が，教員と学校司書の協働促進の一要素として実証されている（Bailey, et al., 2007)。当該プロジェクトの成果として，児童に読書の楽しみを促すことへの効果，教員と学校司書がお互いを専門家として尊重し合うことの意義があげられている。

本調査結果ではさらに，保護者へのアプローチについて言及があった。これについては，日

本での取り組みとして親子読書が当てはまるであろう。このように，児童生徒を取り巻くあらゆる関係者に対し，専門性を備えた学校司書が配置されていることを明確にすることによって，学校図書館を理解してもらう努力が一層活かされると考える。

さらに，外部とのネットワークの重要性は，学校司書自身にも貢献する。本調査協力者の一人は，自身のSchool Librarian of the Year受賞について下記のように語っている。

“I honestly don't think I'd have had a chance of winning the award without my involvement in CKG and YLG! It has increased my confidence, knowledge and enthusiasm for the job no end! The role of school librarian can be quite isolating, but CKG and YLG give me the chance to be in regular contact with and learn from some of the most inspirational, engaged and enthusiastic children's librarians in the UK.”（Just Imagine）.

このように学校司書が学校内での活動だけでなく，自身の知識やスキルを高めるために外部とのつながりを持ち，自信をつけることができる。そしてそれが結局，コミュニティ全体に貢献することにつながるわけである。学校司書は一人職場であることが多いため，関連する専門職，図書館をサポートしてくれるコミュニティとの関わりは重要である。

4.2　言語活動支援での理論の応用の検討

言語活動の推進において教科学習で探究学習が重視され，児童生徒が情報を読み解き，さらに選択した情報を適切に活用するために，学校司書が「チームとしての学校」の一員として活動することが期待されている。情報リテラシー支援により，児童生徒の読書活動の充実が読書レベルの向上に寄与していくことになるであろう。日本での読書について，“2004年頃から「PISA型読解能力」の育成についての議論が活発になり”（岩崎，2008），それまで主に国語科教育の中だけで扱われてきた読書や読解が，図表や統計から情報を理解し読み取るなど科学リテラシーなども含む概念に転換した（岩崎，2008）。そのため，今後の探究学習の実践において学校司書が教科を横断した学習活動支援を担う機会がさらに増えてくる。しかし，“新学習指導要領において、国語科では、情報を読み取り、取捨選択してまとめるなどの一連の言語活動が視野に入れられるようになったものの情報活用能力との関連は明確には示されておらず、一方、情報活用能力の育成を目標とする情報教育の側からは言語活動としての「読書」との関連がまだ十分考慮されていない”（米谷，2011，p.31）との指摘に見られるように，言語活動全体を俯瞰した適切な活動支援に至っていない。

読書指導に関して学校司書が知識を習得する機会としては，司書教諭科目「読書と豊かな人間性」をあげることができる。当科目は司書教諭科目ではあるものの「学校図書館の整備充実報告」による学校司書養成モデルカリキュラムで必須科目として設定されており，司書教諭科目の履修で代用できることになっている。科目内容の中に，“読書の指導方法（読み聞かせ、ストーリーテリング、ブックトーク等）”（「学校図書館の整備充実報告」，p.29）が含まれてい

る。これらの具体的な方法については，様々なテキストや事例集などで解説されており，現職の司書教諭や学校司書は十分に理解していることと思われる。したがって，こうした手法を実際の授業でどのように取り入れていくことが読書力を高めるために効果的なのか，そこでは学校司書がどのように関わるのかについて，イギリスやオランダでの回答に見られたような理論に基づいて展開できれば，安定した質の高い教育支援を期待できると思われる。さらにまた，学校司書が教員と協働して指導の支援に携わるためには，読書教育に関する知識習得の研鑽が求められる。このことは同時に，学校司書の専門性の維持・継続につながる。これらのことを鑑みると，現状の「読書と豊かな人間性」科目の履修が適切といえるのかについての検討や，教育学分野での読書指導に関する理論の研究・開発に継続的に関心を持つことが必要であろう。

５．まとめ

本研究では，これからますます活発になると考えられるアクティブラーニングでの学校図書館の活用を念頭に，海外の学校司書の活動調査に基づいて，日本の学校司書の児童生徒の言語活動での役割を検討した。本調査結果から，言語活動の促進を見据えて，様々な企画をきっかけとして児童生徒が読書に親しみ，教員や保護者などの大人が児童生徒と読書の楽しみを共有すること，理論に基づく読書指導の実践，教員や学校に関わるコミュニティとのよいパートナーシップの構築，の３つの要素が重視されていたことがわかった。これらは先行研究で指摘されていることであり，そのことを本調査で確認できたといえる。さらにこれらのことから，学校司書には読書活動支援・学習活動支援を支えるパートナーシップの構築への努力，言語活動支援においての教員と協働した読書指導の知識の習得，学校司書の専門性を活かした教員に対する積極的な支援が何よりも重要であることを指摘した。もちろん，居心地の良い環境作りも欠かせない。本調査協力者の一人は，優れた学校司書は生徒に対しても教員に対しても，単に本だけでなく安心できる場所と信頼を提供すると述べている。したがって，本調査でも“「場」を提供する役割”（日本図書館協会学校図書館職員問題検討会，2016，p.５）が十分に意識されていることは明らかである。

しかしながら本研究では，調査協力者らによる種々の実践内容の詳細まで踏み込んだ調査を行っていない。これは，本研究が概要を把握することを目的としており，読書指導などの活動そのものに踏み込むことを目的としていないことによる。加えて，本調査対象地域での学校図書館，学校司書の社会的役割や児童生徒を取り巻く環境など，それぞれバックグラウンドが日本と異なることを考慮すべきだからである。

今後は，上述の調査での限界をカバーするとともに，諸外国で実施されている学校司書を対象とした研修内容の詳細を調査して，学校司書の役割と可能性についてさらに検討する必要があると考える。また，本調査で十分に実態を把握することのできなかった幼小接続に関しても，幼児教育のプロジェクト活動から学校教育での探究学習活動へと円滑に繋げていくために引き

続き検討したい。これらの調査分析をふまえて，「学校図書館の整備充実報告」の学校司書養成モデルカリキュラムで示された各科目のねらいと学校司書の活動・研修内容項目とを照合しながら，大学での人材養成においてどのような授業内容が求められるかを検討することで，最終的にこれからの教育カリキュラムのあり方を示すことを目標とする。愛知淑徳大学人間情報学科では，2016年度から学校司書養成に寄与するべく独自のSMS（School Media Specialist）プログラムを設定した（伊藤，2016）が，継続的な研究により当学科での学校司書養成についての今後のあり方を考えていくことにも活かしていくことが可能であろう。

謝辞

本研究の調査に快くご協力くださったみなさま，拙稿に有益なコメントをくださった三重大学非常勤講師木幡智子氏に心よりお礼申し上げる。

注・参考文献

Anderson, Kirsty（2014）. 9 Non-fiction. Primary English for Trainee Teachers. Sage, p.160－161.

Bailey, Mary; Hall, Christine; Gamble, Nikki（2007）. Promoting school libraries and schools library services: problems and partnerships. English in Education. vol. 41, no. 2 , p.71－85.

Chambers, Aidan（1991）. The Reading Environment: How Adults Help Children Enjoy Books. Thimble Press, 96 p.

Chambers, Aidan（1993）. Tell Me : Children, Reading & Talk. Thimble Press, 129 p.

中央教育審議会（2015）.「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo 0 ／toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf,（参照2016－11－11）.

Chu, Samuel Kai Wah, et al.（2017）. Chapter 7 Guides and suggestions for classroom implementation. 21st Century Skills Development Through Inquiry-Based Learning From Theory to Practice. Springer Singapore, p.131－161.

CILIP SLG, SLA. Pupil Library Assistant of the Year Award. http://libpupilaward.wixsite.com/home,（参照2016－11－11）.

Daniels, H（1994）. Literature Circles: Voice and Choice in the Student-Centered Classroom. York, Me., Stenhouse Publishers.

Department for Education. The National Strategies. Talk for Writing: pack. In National Archives.

http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20110809101133/nsonline.org.uk/node/163592,（参照2016－11－11).
現在は，下記で入手可：
Corbett, Pie; Strong, Julia (2011). Talk for Writing across the Curriculum with DVD: How to Teaching Non-fiction Writing 5－12 Years. Open University Press; Pap/DVD Re edition.

Ejikeme, Anthonia N.; Okpala, Helen N.（2016）. Promoting children's learning through technology literacy: challenges to school librarians in the 21st century. Education and Information Technologies. vol. 21, iss. 2，p. 1－15.

Eri, Thomas; Phil, Joron (2016). The challenge of sustaining change: contradictions within the development of teacher and librarian collaboration. Educational Action Research. p. 1－17.

学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議（2016).「これからの学校図書館の整備充実について（報告)」.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/10/20/1378460_02_2.pdf,（参照2016－11－11).

学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議（2014).「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について（報告)」.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/01/1346119_2.pdf,（参照2016－11－11).

GO opleidingen. Diplomaopleiding. GO Mediacoach voor Bibliotheek- en Mediatheekprofessionals. http://goopleidingen.nl/Mediacoach,（参照2016－11－11).

平久江祐司（2014).「言語活動の充実を支援する学校図書館：地域連携型の学校図書館へ」.（特集　図書館情報学と現場がめざすこと）. 現代の図書館，vol. 52, no. 1，p. 47－52.

樋渡美千代，三浦登志（2013).「主体的に生きぬく力をはぐくむ読書活動の推進：地域全体及び学校経営における推進の方向性」. 山形大学教職・教育実践研究，8，p. 39－48.

家城清美（2007).「韓国と北欧の学校図書館見学記：北欧の学校図書館」. 同志社大学図書館学年報. 33号，p. 62－79.

伊藤真理（2016).「愛知淑徳大学人間情報学科における学校司書養成への取り組み」. 愛知淑徳大学論集―人間情報学部篇，第６号，p. 29－37.

岩崎れい（2008).「４.３. 子どもの読書に関する教育学的研究」.『子どもの情報行動に関する調査研究』（図書館調査研究リポート, no. 10).
http://current.ndl.go.jp/node/8472,（参照2016－11－11).

Jollife, Wendy（2014）. 2　Speaking and listening: spoken. Primary English for

Trainee Teachers. Sage, p. 25.

Just Imagine. Top Tips from Amy McKay, School Librarian of the Year 2016. http://justimagine.co.uk/2016/10/16/top-tips-from-amy-mckay-school-librarian-of-the-year-2016/?mc_cid=d 1 e016f 5 dd&mc_eid＝ 8 fa6907da 0 ，（参照2016－11－11）.

桑田てるみ（2011）.「思考力・判断力・表現力等の育成を目的とした「言語活動」に学校図書館はどうかかわるか」.（特集　言語活動と学校図書館）. 学校図書館，726, p. 16－19.

Lance, Keith; Hofschire, Curry Linda　(2012).　Change in school librarian staffing linked with change in CSAP reading performance, 2005 to 2011. Library Research Service,　9 p.

米谷優子（2011）.「日本における読書教育と読書推進策：情報リテラシー教育との関連から」. 園田学園女子大学論文集. 第45号，p.19－39.

文部科学省初等中等教育局教育課程課（2011）.「現行学習指導要領・生きる力」. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301088.htm,（参照2016－11－11）.

文部科学省初等中等教育局教育課程課（2011）.「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1300857.htm,（参照2016－11－11）.

村山正子（2014）.「各教科の言語活動の基盤となる学校図書館経営」. 学校図書館学研究，16, p. 81－88.

Nationale Opleiding MediaCoach(English page). https://www.nomc.nl/english,（参照2016－11－11）.

日本図書館協会学校図書館職員問題検討会（2016）.「学校図書館職員問題検討会報告書」. http://www.jla.or.jp/Portals／ 0 ／data/content/information/gakutohoukoku2016.pdf,（参照2016－11－11）.

西辻正副（2013）.「言語活動の充実に学校図書館を生かすために」.（特集　学力向上と学校図書館）. 学校図書館，752, p. 14－17.

岡亨（2011）.「すべての教育活動に学校図書館を、読書指導を－言語活動の充実を目ざして」.（特集　言語活動と学校図書館）. 学校図書館，726, p. 25－28.

Rotterdam Public Library. A short after movie impression of the children's book event last Sunday: https://youtu.be/pazXQKwutJY,（参照2016－11－11）.

School Library Association. Training. http://www.sla.org.uk/training.php,（参照2016－11－11）.

School Library Association. Training for those working in school libraries (updated Sept 2015). http://www.sla.org.uk/links-training-for-those-working-in-school-libraries.php,（参照2016－11－11）.

Schlueter, Laura(2015). The influence of teacher and school librarian collaboration on reading. University of Central Missouri, 30 p.

http://centralspace.ucmo.edu/handle/123456789/425,（参照2016－11－11).

滋賀県教育委員会学校教育課幼小中教育指導係（2016).「平成27年度学びの基礎体験型学習プロジェクトのまとめ」.
http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/gakko/manabinokiso/files/h28kisomatome.pdf,（参照2016－11－11).

島根県教育委員会（2012).「幼保小中連携参考事例（平成23年度)」.
http://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/H23youho_sankou.data/H23youho_sankou.pdf,（参照2016－11－11).

Talk 4 Writing. http://www.talk 4 writing.co.uk/,（参照2016－11－11).

Wilson, Bill; Kelly, Christopher; Sherretz, Kelly（2016). Delaware school libraries master plan: quality school libraries = higher student achievement. Institute for Public Administration, University of Delaware.
http://www.ipa.udel.edu/publications/delaware-school-libraries-master-plan2016.pdf,（参照2016－11－11).

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010).「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告)」.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_１_１．pdf,（参照2016－11－11).